

## ざいちのち

No.18 2010.04.

まちやむら、そこに住む人びと（=ざいち）の、  
知恵や生き方（いち）から学び、実践する活動です。

京都大学

存在基盤科学研究センター

東南アジア研究所「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

亀岡 保津川

## 亀岡フィールドステーション

愛宕参道の宿場まち・清滝の隆盛と衰退、  
そして現状を聞く

NPO プロジェクト保津川 豊田知八

「ほととぎす 嵯峨へは一里 京へ三里 水の清滝 夜の明けやすき」と文豪・与謝野晶子の「みだれ髪」にも詠われ、かの文人達が愛した清滝は、京都市右京区愛宕山東麓にある山里で、江戸初期より愛宕山参詣の宿場町<sup>[1]</sup>として開けた。

現在、僅か 21 件の民家が佇む清滝が最も隆盛を誇ったのは、嵯峨と清滝間に敷設された愛宕山鉄道<sup>[2]</sup>が開通した昭和 4 年(1929)から昭和 19 年(1944)までの 16 年間だという。

「嵯峨から愛宕鉄道で、清滝から山頂(924m)までは『東洋一』と称された愛宕ケーブルカーで登った。頂上周辺にはホテルやスキー場、遊園地まであり、山は一大観光レジャー地になった。愛宕参拝客に混じり、多くの観光客が押しかけ、ケーブル清滝駅前には長蛇の列が出来、それは賑やかやった」と清滝唯一の料理旅館「ますや」<sup>[3]</sup>の主人・森田雅雄さん(82)は懐かしく当時を語る。この頃、旅館やお茶屋が 31 軒(参道の店も含む)もあり、また、林業や松茸、山菜など山の幸の収穫で、集落の収入源<sup>[4]</sup>は安定していたという。

「だが、敗戦色が濃くなった昭和 19 年に鉄道は不要路線に指定、レールは軍事用に資材転用された。鉄道廃線後の清滝は火が消えた様に静かになった」と森田さん。戦後は林業など第一次産業も衰退し、山峡で農産地のない清滝の経済基盤は著しく低下した。

経済基盤の衰退と鉄道廃線後の交通網の不便さは、都市近郊の山峡集落から職と住を求める若年層の人口流出を加速させた。

今では住民の約 95%が 60 歳以上の高齢層となり、21 件の内 5 件が独居老人家庭。また、嵯峨学区で唯一、子供のいない集落に転じ、新規入居者もない今、

清滝は近い将来、集落の消滅を招く可能性も否定できない。

都市近郊の山峡景勝地という恵まれた地理的環境と歴史・文化を有しているにもかかわらず、僻村の過疎地と同様の「衰退から消滅へ」という経過を辿ろうとしている。

「さびしい限りです…」と森田さんは今の集落の現状を嘆く。

しかし、再生への取り組みも始まっている。愛宕山及び愛宕信仰の歴史的、宗教的な研究<sup>[5]</sup>や、修験者が馳駆した参道「愛宕街道」、清滝と「食の供給地水尾、亀岡」を結ぶ物資輸送の街道「米買道」等の近隣地との物・人の流通の調査、またケーブル廃線跡の検証も市民レベルで始まった。

今後は、複合的な自然・社会環境の変動が及ぼした集落の変遷と現状の詳細調査を進め市民、NPO、そして旧住民と現住民<sup>[6]</sup>との人的交流推進と、自然、歴史文化、産業等において、豊富な蓄積を持つ清滝の潜在的価値の再構築を図り、集落存続の可能性を探る具体的活動の創造へつなげていきたい。



写真:愛宕山麓に佇む清流の里

## 脚注

- [1] 修験道の祖・役行者が開山。山岳信仰・修験道の修業場だけでなく、全国から講の人たちはもちろん、「火廻要慎のお札」(火の用心)のご利益を求めて、多くの庶民も物見遊山に訪れていた。
- [2] 嵐山—清滝間 3.4km と清滝川—愛宕山頂 2km を結ぶ鉄道。1929 年—1944 年まで。
- [3] 1631 年(寛永 8)創業の老舗旅館。与謝野晶子・鉄幹夫妻や徳富蘆花などの文豪や旧三高等学校の学生が集う逍遙の宿として田宮虎彦、山口誓子、織田作之助、梶井基次郎、三好達治、湯川秀樹など多くの文化人や財界人が学生の頃、常宿にしていた。
- [4] 旅館やお茶屋は主に女性、男性は主に山、川の仕事に従事していた。この頃、清滝川に筏や観光船が流れていた。
- [5] 京都愛宕研究会 市民による愛宕神社御鎮座千三百年記念委員会が主体となり平成 16 年に発足。連続講座やシンポジウム、フィールドワークを実施している。
- [6] 疎遠となっていた現住民との交流を深める目的に、清滝を離れた旧住民の名簿を平成 18 年に作成。

## 守山フィールドステーション

### 2010年4月、守山FSの活動にむけてー新たな思いー

#### 自分の田んぼはどうなる？

聖泉大学 高谷好一

ほんの1反歩しかないのだが、私は水田を持っている。自分ではよく作れないものだから、同じ字のM氏に作ってもらっている。しかし、そのM氏もう80歳近い。間違いなく5年もすれば耕作してもらえなくなるだろう。そうなったら俺はどうするのだ。こんな状況になってきて、急に村落営農の研

究などは始めるようになった。何とかして生き延びたいからこんな研究を始めたのである。

一方では、私の字には「道の駅」風のファーマーズマーケットがつい最近出来た。こちらの方は予想以上に流行っている。町からも野菜を買いに来る人が増えて、今まで何も無かった所に賑わいが出来ている。私の字も本当に大きな曲がり角に差し掛かったようなのだ。こんな問題を今年は少し詰めて考えてみたい。

#### 数字やデータがもつ力を活かす

守山FS 研究員 嶋田奈穂子

この2年間、ナレズシを作ったり、ソバを栽培する中で、地域から学び、住む人と共に取り組むということ、常に意識してきました。そのために、あえて、積極的な数値データの収集や構築はしてきませんでした。「データからよりも、人の話から」「データ構築よりも、実践を」と無我夢中だったような気がします。

この春、守山市で地域の情報誌を作っておられる女性に、これまでの取り組みをお話しする機会を得ました。一通りお話しした後、彼女はあるデータに

興味をもたれました。それは、1975年～85年と1992年で比較した、琵琶湖魚の漁獲量の増減のデータでした。「琵琶湖の在来魚は、どれも減っていると思っていたら、増えているのも、変わらないものもあるんですね!」「たぶん、守山市に住んでいる方でも、知っている人は少ない。でも知りたいと思いますよ」と彼女に言われてハッとしました。私が遠巻きにしてきた数字やデータが、こんな風に興味をもたれたり、ニーズがあると思っていなかったからです。啓発や相互理解を進めるためには、数字やデータがもつ力を借りることも必要で、そこにニーズがあるなら尚更だと思い直しました。また、人に教えられ、それを実践しようと思っています。

#### 在所に生きる人々の生活を見つめ直す

生存基盤科学研究ユニット 藤井美穂

「在所」とは何かという大きな問いについて、ライフ・ヒストリーを描くことによって、在所に生きる人々の生活を見つめ直していきたい。写真や民俗資料館などでみられる水車、農具などは、すでに失われてしまった農村の暮らしとして、人の目をひき、関心が持たれる。一方、現在、どこの農村でも目にする水田の用排水路は、当たり前すぎて、面白くない。だが、かつて在所に存在した水車などよりも、まず、現在みられる水田の用排水路のようなごくありふれたものに注目をしたい。

水田の用排水路の整備にいたる過程には、在所の人々の土地や田などに対する様々な心情が刻まれ

ている。このように、ありふれた在所の風景には、人々の思いがこめられており、それは、単なる風景ではなく情景といえよう。水田の用排水路は1例にすぎないが、「在所とは何か」を理解するために、在所の特異性に焦点を合わせるのではなく、むしろ当たり前すぎる在所の生活について聞き取り調査をしていくなかで、在所の情景と人々が体験した歴史的な出来事がどのように織りなして、現在に至ったのかを考えていきたい。



写真:野洲川堤防沿いに在所の人たちが植えた寒桜が咲いた(2009年11月18日撮影)。

## 朽木フィールドステーション

### 「くらしの森」づくりに向けて -2010年度に取り組みたいこと-

朽木FSでは、椋川・針畑（高島市）、余呉（長浜市）において、「くらしの森づくり」を目指した取り組みを進めています。

#### 椋川

#### 結いの里・椋川 是永宙 朽木FS 研究員 島上宗子

椋川での取り組みの柱は、カヤとナラが豊かに繁茂する原野の復元です！ 雪解けとともに、3反あまりの復元実験地に再び、獣害用ネットを張りました。昨年末、重機で雪を押し分けて土を掘り返し、腐植土を運びこんで作ったナラの苗床（本ニュースレター2月号参照）。ナラ苗は少しずつ育ちつつあります。4月中には鳥害用のネットで覆う予定です。動物たちとの共生に今年も奮闘です。8月には、3年目になる休耕田での焼畑です。今年は少し場所を移して、紅カブラ、大根などを植える予定です。秋

には毎年恒例の「おっきん！ 椋川」収穫感謝祭で、焼畑の産物を販売します。今年は加工品（紅カブラの糠漬、などなど）も販売予定。紅カブラを使った創作料理も構想中です。

山が多様なにぎわいを取り戻せば、山里の生業・暮らしも多様に、豊かになる……。そんな夢に向かって、今年度も“奮戦”記、お届けします！



写真1: 雪の消えたカヤダイラ復元実験地。ふたたび獣害用ネットを張る(2010年4月、椋川)。

#### 針畑

#### 朽木FS 研究員 今北哲也

「水のエネルギー」分野では、針畑川沿いの在所のなかに水車を設置します。昨年、ワークショップの試運転では200W前後の発電が確認できました。電力は獣害防止の電気柵に、一方水車の動力は、伝統的な石臼精米・製粉に活かします。針畑谷に新規就農した若い人らと連携しての取り組みです。

水車を稼働させた後の放流水は最寄りの休耕田に導き、フキの水耕栽培実験に利用する予定です。鹿の食害で激減してしまったフキはかつての針畑

谷で特別に大切な「草」でした。田の凶作に備え、救急食料の代表選手として毎年加工保存していました。

「火のエネルギー」分野では、椋川や余呉のサイトに火入れ後2、3年目以降に植える有用低木を、針畑で準備します。この頃から草がはびこってくるので、作りまわしの作物は野菜や雑穀ではなく、有用低木に交代です。苗床に挿し木し自前で苗木をつくります。まずは、葉を採るヤマウコギと実を採るガマズミから始めます。やがて山や原野に移植する場面がたのしみです。

#### 余呉

#### 朽木FS 研究員 増田和也

余呉では焼畑耕作を主軸にして取り組んでいます。昨年度には、赤子山（中之郷集落、「ウッディーパル余呉」）の草地で焼畑を拓き、在来種である山カブラを中心に栽培しました。本年度は、同地での焼畑を継続するとともに、林野の伐採地に火入れできるよう、菅並集落で話し合いを進めています。耕地では火入れ前後の植生や土壌について定点観測し、火入れによる効果と影響について比較・分析する予定です。一方で、地域の方々からかつての暮らしについて伺いながら、余呉における林野との付き合い方を社会文化的な側面からも学んでいこう

と計画しています。また、地域との交流を深めることも本年度の目標のひとつです。地域の方々が私たちの取り組みに関わっていただけるような機会を組み入れながら、研究の成果や焼畑の現代的な意義を共有できればと思っています。まずは5月の連休に田植えにお邪魔しながら、これからのことを話し合っていきます。



写真2: 焼畑での収穫。カブラとダイコンは糠漬けにして試食した。これを加工品として地元の産物とすることが、次の目標(2009年11月、余呉・赤子山)。

### ■第23回 定例研究会

1. 日時：平成22年4月23日（金）16:00～19:00
2. 場所：守山FS（滋賀県守山市梅田町12-32）
3. 発表者：島上宗子（朽木FS 研究員）

## 日本の市町村の防災・減災の取組はアジアの 開発途上国のお手本

東南アジア研究所 安藤和雄

ソー・ピョウ・ナインさんに東南アジア研究所の国際共同研究での成果発表の機会に来日してもらうことができました。日本では台風、洪水、地震などの自然災害に対する防災、減災対策は、地方自治体の大きな役割になっています。しかし、ナインさんの国、ミャンマーでは、地方自治体の行政サービスは日本ほど充実していないのが実情です。開発途上国といわれる国々では、ほぼ同じような状況です。ナインさんには、日本の地方自治体の防災、減災のとりくみの事例に直接ふれてもらいたいという希望を私は抱いていました。守山市役所の方々のアレンジのおかげで、守山市コミュニティ防災センターでお話をきくことができました。ナインさんの滞在期間は2010年3月22～31日で、3月26日に防災センターへナインさん、高谷好一先生、私が訪問し、大崎次郎センター長から守山市防災マップの洪水ハザードマップを広げて、お話をうかがいました。お話の後で説明にできた地点を高谷先生の案内で、実際の現場を訪問しました。

ナインさんは、現在、マンダレー大学副学長（学術担当）であり、1999年にミャンマーのラカイン州で科研プロジェクトの共同研究を開始した時からの私たちのカウンターパートです。ナインさんは当時ヤンゴン大学地理学科准教授でした。ミャンマーでは教育省傘下の大学教員が海外へ出張することが厳しく規制されています。実に3度目の挑戦によりやっとミャンマー政府から許可が降りたのでした。

日本ではすでに大方の人から忘れさられていますが、2008年4月27日にサイクロン・ナルギスがベンガル湾で発生し、5月2日にはミャンマーのエーヤワディー（イラワジ）・デルタに上陸、死者・行方不明者が138,000人という災害史においても特筆される被害の爪あとを残しました（[http://en.wikipedia.org/wiki/Cyclone\\_Nargis](http://en.wikipedia.org/wiki/Cyclone_Nargis) 参照）。科研プロジェクトに引き続き、21-COEプロジェクトによりミャンマーFS（フィールド・ステーション）を2003年にSEAMEO-CHAT（東南アジア諸国教育省連携機構歴史・文化・伝統地域センター）に設置し、

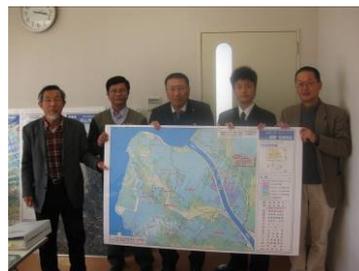
### 4. 発表内容

「中スラウェシにみる『くらしの森』：焼畑の村、映像記録の試みから」

\*参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室（担当：鈴木 rsuzuki@cseas.kyoto-u.ac.jp）までご連絡ください。

2006年までヤンゴン大学地理学科・動物学科からのメンバーを中心に、大西信弘さん（当時は21-COE研究員）がコーディネーターとしてFSに3年間滞在し、エーヤワディー・デルタのマウービン郡の3つの村で総合的調査研究を実施しました。その村々がナルギスの被害にあいました。直後に、調査村では死傷者は0人であったことがナインさんより伝えられ、安堵したことをよくおぼえています。外国人の被害地帯への入域が政府により厳しく制限されたことから、現地のメンバーにより調査村での被害等に関する調査プロジェクトを東南アジア研究所の国際共同研究助成を受け、スタートさせたのです。

高潮による洪水と強風による被害がナルギスの被害の直接的原因ですが、大型のサイクロンがベンガル湾を東進してエーヤワディー・デルタに上陸するのは稀であり、住民にとっては、まさに初体験だったのです。このことが被害を大きくさせた一因となったのだと指摘されています。ナインさんの専門は自然地理学であり、ハザードマップに大きな関心があったようです。ミャンマーでもこれに類した地図をつくり、住民に避難場所などを周知させることが必要で、自分たちの研究チームでマウービン郡のハザードマップをつくってみたいと、希望を述べていました。ミャンマーの地方自治体には私やナインさんが知る限り、サイクロンや他の自然災害が発生した時の行政マニュアルが存在していないので、これもミャンマーでは参考になります。ハザードマップに限らず、私のアジアの開発途上国での経験から、日本の地方自治体の防災・減災の取組はアジアの開発途上国のお手本となっていると指摘できます。日本の市町村はこの点でも国際的な役割をになっていることを、是非、役場や住民の方々に理解していただきたいのです。ナインさんへのお話をこころよ



写真：防災マップをかかげての記念撮影（左から2人目がナインさん）。

く引き受けていただいた、守山市コミュニティ防災センターの大崎センター長と職員の方々、守山市みらい政策課の木村さんに感謝を致します。ありがとうございました。